

原 著

## 保育・子育て実践に関する「参加型ワークショップ」を用いた ジェンダー・バイアスへの「気づきプログラム」および「評価方法」

三村 保子\* 力武 由美\*\*

### <要 旨>

筆者らの前回の研究<sup>1)</sup>において、保育現場で慣習的に自認されてきた保育・子育て実践における「個の尊重」とは、性別役割分業（ジェンダー）の尊重を前提とする「個の尊重」であることが明らかになった。このように保育・子育てに携わる者が性別役割分業を深く内面化し、保育・子育て環境がジェンダー・ブラインドな状況にあることは、「個の尊重」を実現するうえで妨げとなる。

そこで、本研究においては、次世代育成にかかわるあらゆる立場の人が連携して「ジェンダーに敏感」になることが必要であるとの認識のもとに、ジェンダーへのとらわれに「気づき」を促す「参加型ワークショップ」を地域で展開していくことが有効であるとの仮説を立てた。それにもとづき、日常生活のなかにとけこみ「自然な風景」となっている場面を題材に用い、「参加型ワークショップ」を考案した。さらに、ワークショップ効果を確実なものとしていくため、先行研究がほとんどないなか、「評価方法」を考案した。参加型ワークショップと評価方法の考案に際しては、意識および行動の変革への動機づけは、「実感」と「理解」との両面が達成されてこそ可能であるとのコンセプトをベースにした。

本研究で考案した参加型ワークショップを、K市内保育所2箇所、幼稚園1箇所、市民センター1箇所において、保育士、幼稚園教諭、保護者、子育て支援関係者延べ61人を対象に、5回実施した。その結果、(1)少人数グループで話し合うことの意義、(2)ワークショップの題材に、日常生活の身近な場面を取り上げイラストにしたものを用いることの効果、(3)「実感」と「理解」の両面から「気づき」を促すことの効果が明らかになった。さらに、今後の課題としては、(1)参加型ワークショップを効果的に展開させるためのファシリテーターの技法の工夫、(2)評価方法の構築、(3)ワークショップに用いる時間の設定の3点が浮かび上がった。

キーワード：参加型ワークショップ、保育・子育て実践、ジェンダー・センシティブ、ジェンダー・バイアス、評価方法、地域における連携

### I. 研究の目的

保育・子育て現場において慣習的に理念とされ実践していると自認されてきた「個の尊重」が、保育実践のなかでどのように実態化されているか、また実態化に問題があるとするれば何が障害となっているのかを明らかにするため、一つには保育士・保護者の保育理念と保育実践との相関、二つには保育実践とジェンダー意識との相関を明らかにする調査を、筆者らは2005年8月に実施した。<sup>1)</sup>

その結果、保育理念として掲げられた「個の尊重」の実践とは、あくまでも固定的性別役割分業を前提と

する個の尊重であること、さらに真の意味での「個の尊重」を実態化する上で障害となっているのは、保育・子育てに携わる者に内面化されたジェンダー・バイアスであることの2点が明らかになった。つまり、保育・子育てに携わる者が自らのジェンダー・バイアスに気づかないまま、子どもにジェンダー意識を再生産している実態が判明した。

以上のことから、保育・子育て実践に携わる者が、ジェンダーに敏感になることがまず重要であるとの認識のもとに、本研究では、自らのジェンダー・バイアスへの「気づき」を促す手法として「参加型ワークショップ」<sup>2)</sup>が有効であるという仮説を立て、その

\* 西南女学院大学短期大学部保育科 教授

\*\* 西南女学院大学短期大学部生活創造学科 非常勤講師

妥当性を検討することを目的とする。さらに、その有効性を評価する方法の開発とその普遍性を検討する。

参加型ワークショップとその評価方法に関する先行研究としては、山梨県立大学が地域との連携のなかで行っている実践的「0歳からのジェンダー・フリー」教育がある。この先駆的な研究にはワークショップの実施が含まれているが、ワークショップの評価は行われていない。また、幼稚園教師のジェンダー意識の変革をねらいとして、ジェンダー・フリー・プログラムを実施し、その効果測定をした佐藤・田中（2003）の研究がある。<sup>3) 4)</sup> 佐藤らの研究は3名の幼稚園教諭を対象に、テキスト（絵本）の講読、講義、ディスカッション、個別指導を内容とする研修会を実施し、ジェンダー・バイアスを除去しようとしたもので、評価も実施しており、一定の成果が報告されている。しかし、本研究が対象とするジェンダーへの気づきをうながす「参加型ワークショップ」手法の有効性をジェンダーの視点でアプローチした研究は、先行研究の中に見出すことはできなかった。

したがって、本研究で筆者らが考案したジェンダーに敏感な保育・子育て実践に関する参加型ワークショップは、先行モデルがないために精緻なものとは言い難いが、本研究に先立つプレテストとして、2005年11月にK市内の保育所で、保育士・保護者・子育て支援関係者を対象に初めて実施した。その結果、参加者から「気づき」を促す反応を得ることができたので、「参加型ワークショップ」および「評価」の原案を実施・検討することにした。

なお、この「参加型ワークショップ」は地域との連携によるジェンダーに敏感な保育者養成プログラムの一環として開発するもので、長期スパンに立つ本研究の最終目標である。今回の研究はそのための第一歩として位置づけたい。

本研究においては「参加型ワークショップ」を、少人数のグループを作り、参加者が対等な関係性のなかで相互的に学び合うワークショップという意味に用いる。

## II. 参加型ワークショップおよび評価方法考案のコンセプト

### 1. 参加型ワークショップの目標

保育・子育て環境におけるジェンダーへのとらわれの現状および日常の保育・子育て場面におけるジェン

ダーの刷り込みを改善し、個を尊重した保育・子育て環境を形成していくためには、まずは、保育者および保護者自身が社会化の過程で内面化してきた「ジェンダー」への気づきを促すことが、最優先課題である。したがって、本ワークショップでは参加者自らがジェンダーに気づくことを目標にした。

### 2. 参加型ワークショップ考案のコンセプト

1. で述べた目標に沿って以下のようなコンセプトに基づき、ワークショップを考案した。

#### ①ワークショップ参加の基本的スタンスと合意

参加型ワークショップは、従来の教授法とは異なり、講師による知識の伝達を学びの基本としたものではなく、参加者一人ひとりが多様な経験や知識をもつ存在として参加し、その多様性に触れることで「違い」に気づきながら学び合うことを基本とする。したがって、参加者一人ひとりが対等な関係性のなかで学びあう参加型ワークショップにおいては、以下の点を共通ルールとして事前に合意しておくが必要になる。

- ・参加者一人ひとりがワークショップに積極的に関わる。
- ・ワークショップ参加者一人ひとりの人格や個性を尊重する。
- ・異なった体験や異なった意見を聴く。
- ・異なった体験や異なった意見から自分が経験していないことを学ぶ。
- ・自分の経験に基づいて考え、自分の言葉で表現する。
- ・ワークショップで話されたプライバシーを守る。

#### ②ワークショップで使用する素材

「当たり前」のことをジェンダーの視点で問い直す作業とは、日常化され無意識化されているために、問題を問題として見るができない場面に対して、あらためてどう思うのかというところからスタートする必要がある。

- ・通常、「当然」あるいは「自然」だととらえている保育・子育て場面について、「個の尊重」を再考するにあたり、作られた社会的役割であるジェンダーの視点から問い直すために、日常よく目にする風景をイラストで提示する（イラスト①②）<sup>5)</sup>

#### ③ワークショップの展開方法

「当たり前」の場面を「ジェンダーの視点」から問い直す作業は、自分の過去・現在のさまざまな場面で感じた抑圧や言葉にならない感情を思い起こし、それを言語化することを必要とする。参加者はそれらの感

情が、個性よりも社会的に作られた性役割の方が優先され、ジェンダー・ステレオタイプを押し付けられようとするために生じることを理解する。

ワークショップを次のように進める。

参加者に対し次の3点を説明する。

①趣旨説明(60分間のワークショップの場合は5分間)

<ゴール>

- ・ジェンダーに敏感な保育・子育て環境ネットワークの形成。

<意義>

- ・ジェンダーに敏感な保育・子育て環境の重要性。

<今回のねらい>

- ・ジェンダーに敏感な保育・子育ては、「気づき」から始まる。

②グループディスカッション A

日常の風景「お手伝い」(イラスト①)

(60分間のワークショップの場合は15分間)

イラスト①と3色の紙を配付し、それぞれの観点から各グループでディスカッションを行った後、各グループから出された意見を共有し、ファシリテーターは論点を整理しながら解説をする。

<グリーン紙：肯定意見>

イラスト① お手伝い



イラスト② 父と息子



<黄色紙：反対意見>

<ブルー紙：その他の意見>

<ピンク紙：ジェンダーに敏感なかわりとは？>

「お手伝い」に対する意見の共有と解説

(60分間のワークショップの場合は5分)

③グループディスカッション B

日常の風景「父と息子」(イラスト②)

(60分間のワークショップの場合は15分)

<グリーン紙：肯定意見>

<黄色紙：反対意見>

<ブルー紙：その他の意見>

<ピンク紙：ジェンダーに敏感なかわりとは？>

「父と息子」に対する意見の共有と解説

(60分間のワークショップの場合は5分)

④質問・感想・まとめ(10分間)

⑤評価(5分間)

ワークショップの展開に際し、次のことに留意する。

- ・筆者らが共同ファシリテーターとなり、参加者との対等な関係性のなかで共に学ぶ者として、よき聴き手となり、参加者同士を結びつけ、参加者が自分の力を自覚できるような援助者となる。
- ・少人数グループを作ることで、一人あたりの表現時間を十分取れるようにする。
- ・個人的な体験に基づく感情に、他の参加者も共感を示すことで、ジェンダーが社会的な問題であることを理解する。
- ・各グループで各イラストについて3色の紙をそれぞれ「賛成意見」「反対意見」「その他の意見」用として配付し、自由に意見を出し合う。
- ・仮に「ジェンダー」への賛成あるいは肯定的な意見が出たとしても、それに否定や非難をせず、異なった意見が出ることで、自らのジェンダーへのとらわれに気づき合うよう、ファシリテーターが促す。
- ・各グループで出た意見を、「肯定意見」「反対意見」「その他の意見」の3つの点から、発表し合い、意見を共有する。
- ・最後に、「個の尊重」という点から見ると「ジェンダー」が個性を矮小化し、個の発展を阻害するものであることを十分理解できるように説明し、性別役割にとらわれて生きるより、個性を開花させて生きる方が、生きやすいことを実感できるようにファシリテーターは援助する。

### 3. ワークショップの評価方法

近年あらゆる領域で行動計画の策定や実践後のフォローアップ、評価（アセスメント）、そしてさらなる目標設定を重ね、最終的な目標達成へと推進していくことの重要性が認識されているが、ジェンダー研究に関する評価方法の開発はこれからの課題である。

本調査研究が目指すジェンダーに敏感な保育・子育て環境の形成は、究極的には、個人の意識改革なくしては実現できない。そのため、本調査研究は研究のための研究にとどまることなく、より多くの人と連携して次世代を育てていくという本来の子育てのあるべき姿をとりながら、地域社会に根ざした実践活動を広げていくことが必要である。未だジェンダーに基づく社会構造が維持されていることに加え、文化や伝統の名のもとに男女の性別役割を自然の秩序とする考え方や慣習が根強い日本社会にあって、「気づき合い」を通して自己覚醒をし、そして社会全体に広げていくことのできる参加型ワークショップはきわめて有効なツールであるといえよう。

他方で、参加型ワークショップは知識の伝達を主たるねらいとしていないため、意図して、なぜ「ジェンダー」が問題なのか、なぜジェンダーの枠を取り払う必要があるのか、さらには従来の「個を重視した保育・子育て実践」と「ジェンダーに敏感な保育・子育て実践」とは何が根本的に違うのか、研究成果を基に説明の時間をとらなければ、情緒的レベルの気づきあいに終わってしまう。

その点をクリアするため、本ワークショップの考案にあたっては、ファシリテーターが、各場面に対する各グループからの意見を共有した後、それらの意見の論点整理をして、表1のことを理解できるよう説明することにした。なお、1から10は評価の基準となる項目である。

### Ⅲ. ワークショップの実施

次のように5回の参加型ワークショップを実施した。

- 第1回 日 時：2006年8月10日13：30～14：30  
場 所：K市内A保育所  
参加者：保育士 9名（このうち男性保育士2名）
- 第2回 日 時：2006年8月16日10：00～12：00  
場 所：K市内B幼稚園  
参加者：幼稚園教諭6名

表1 ジェンダーに敏感な保育・子育て実践をめざす参加型ワークショップ評価票

ワークショップに参加して、以下の点についてどうだったか、○をつけてお答え下さい。

A（よく分かった） B（まあまあわかった）  
C（わかりにくかった）

- |    |   |       |
|----|---|-------|
| 1  | ジェンダーが社会によって作られた役割であることがわかった                        | A・B・C |
| 2  | 自分のなかのジェンダーに気づいた                                    | A・B・C |
| 3  | 保育・子育て実践におけるジェンダーに気づいた                              | A・B・C |
| 4  | メディアや日常生活のなかのジェンダーに気づいた                             | A・B・C |
| 5  | ジェンダーが二重規範であることがわかった                                | A・B・C |
| 6  | ジェンダーが性（セクシュアリティ）を作っていることがわかった                      | A・B・C |
| 7  | ジェンダーが女性を第二の労働力にしていることがわかった                         | A・B・C |
| 8  | ジェンダーが人権問題であることがわかった                                | A・B・C |
| 9  | ジェンダーに敏感な保育・子育て実践が必要であることがわかった                      | A・B・C |
| 10 | より多くの人とネットワークを組んでジェンダーに敏感な保育・子育て実践を広げていくことの必要性がわかった | A・B・C |

- 第3回 日 時：2006年8月23日13：30～14：30  
場 所：K市内C保育所  
参加者：保育士8名（このうち男性保育士2名）
- 第4回 日 時：2006年8月23日19：00～21：00  
場 所：K市内A保育所  
参加者：保育士・保護者・子育て支援関係者12名（このうち男性保育士2名、男性保護者3名、保育者養成校の男性教員1名）
- 第5回 日 時：2006年8月24日15：00～16：00  
場 所：K市内D市民センター  
参加者：保育士26名

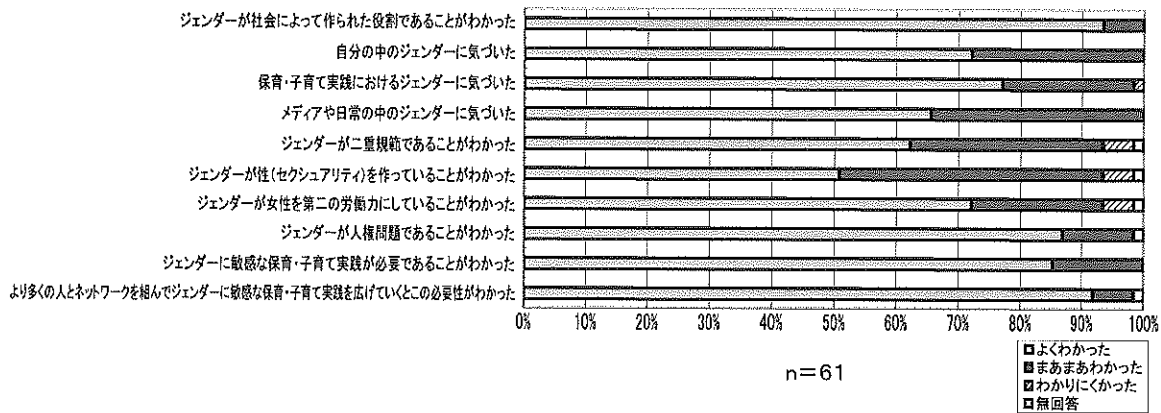
### Ⅳ. 評価の結果

参加型ワークショップを実施した直後に評価票を配付し、記入を依頼し、回収した。結果は以下のとおりである。

#### 1. 評価票の集計結果

5回のワークショップ参加者の延べ人数は61名

図1 ジェンダーに敏感な保育・子育て実践をめざす参加型ワークショップの評価



である。この内訳は男性10名、女性51名。年齢は20歳から50歳代。集計結果は図1のとおりである。

① 「よくわかった」と評価された項目

まず、評価項目の「より多くの人とネットワークを組んでジェンダーに敏感な保育・子育て実践を広げていくことの必要性がわかった」は92%、「ジェンダーが社会によって作られた役割であることがわかった」は93%が「よくわかった」と回答している。次に、「ジェンダーが、人権問題であることがわかった」は87%、「ジェンダーに敏感な保育・子育て実践が必要であることがわかった」は85%が「よくわかった」と回答している。

② 「よくわかった」という評価が低い項目

「よくわかった」という回答が低いのは「ジェンダーが性(セクシュアリティ)を作っていることがわかった」、「ジェンダーが二重規範であることがわかった」および「メディアや日常生活のなかのジェンダーに気づいた」という項目であった。これらはそれぞれ51%、62%、66%となっている。

③ 「気づき」に関する項目

「気づき」をねらいとしたワークショップの評価結果において、注目しなければならないことは、「保育・子育て実践におけるジェンダーに気づいた」および「自分のなかのジェンダーに気づいた」という項目に対し、「よくわかった」と評価している回答者が、筆者らの期待に反して、それぞれ77%、72%と低いことである。

2. 自由記述に示された参加者の評価

ワークショップに対する回答者の自由記述による評価を整理すると次のようになる。

① ジェンダーに関する「知識」が学べた

- ・ジェンダーが歴史的につくられたものであることがわかった。
- ・ジェンダーは、社会がつくり出してきたものなので意識の変革によって、変えていくことができることを学んだ。
- ・今までジェンダーについて考える機会があまりなかったが、今回のワークショップで、日常生活のなかの身近なジェンダーについて、多くの学びができた。
- ・ジェンダーという難しい問題だと思い、にげ腰だったが、これからはジェンダーをこわがらないでよいようになった。
- ・大人がジェンダーに敏感になることによって、子どもがどう変わるかわかった。

② 実感に根ざした「気づき」ができた

- ・自分はこれまで、固定的性別役割分業を当然のことのように受け入れて生活してきたのだとわかった。
- ・日常生活の何気ない会話のなかにも、ジェンダーへのとらわれがあることに気づいた。
- ・当たり前のようにやっていたことのなかに、ジェンダーの縛りがあることがわかった。
- ・自分の心のなかに、「男なのに」「女のくせに」という思いがあることに気づいた。
- ・知らず知らずのうちに「男の子は」「女の子は」と決めつけていることに気づいた。
- ・保育現場での保育士の言動が、子どもに与える影響がわかった。「あっ、これもか」と気づいたことがある。
- ・自分自身、「女の子らしく」「女の子でしょ!」と

言われて育ってきたので、イラストの女の子の気持ちがよくわかった。

- ・保育のなかで、性別にこだわることは、子どもの個性をつぶしてしまうことにつながると気づいた。
- ・性別にとらわれず、「自分らしさ」を大事にする保育をしていくことが、その子の幸せにつながっていくのかなと思った。
- ・自分の人生は、自分が選んで歩むものであることが理解できた。

### ③ グループワークの形式がよかった

- ・対等な関係で学び合えた。
- ・少人数のグループで話し合えたことがよかった。
- ・実際によくある場面をイラストにしたものを見て、賛成意見・反対意見など率直な意見交換ができた。
- ・性別や年齢の異なる人たちと話し合い、いろいろな視点から考えることができた。
- ・他のグループの考えが聞けたこともよかった。

### ④ 学んだことや気づいたことを今後役に立てたい

- ・「男の子らしく」「女の子らしく」と子どもにプレッシャーを与えないようにしたい。
- ・子どもたちへの言葉かけに気をつけたい。
- ・「男だから」「女だから」と考えるのではなく、一人ひとりの子どもをよく見ていきたい。
- ・一人ひとりの子どものもっている良さを、保護者にしっかり伝え、育て方を一緒に考えていきたい。
- ・何気ないことも「どうして?」「なぜ?」と問い直し、職場で語り合いたい。
- ・固定観念に縛られず柔らかい頭で保育をしたい。
- ・私生活にも学んだことをいかしたい。

## 3. 聞き取り調査の結果

ワークショップでの話し合いや自由記述から、保育場面におけるジェンダーへのとらわれに対する気づきが報告されたので、さらに現状を把握するために、ワークショップに参加した保育所の保育士50名中9名に対し聞き取り調査を行った。その結果次のようなことが明らかになった。

### ① 子どもたちのジェンダー・バイアスについて

- ・男の子の名前を「○○ちゃん」と呼んだら、他の子が「女の子みたいや」といった。
- ・保育士が髪を短くカットして来た日、男の子が「先生は女だから短いのはおかしいよ」と言った。
- ・ボーケンジャーが好きと言った女の子に、他の子

が「あんたは女やけプリキュアやろ」と言っていた。

- ・運動会の踊りの演目を子どもたちに伝えると、「それ、男の踊りよ。女の子が踊ってもいい?」と聞いてきた。
- ・就学前の子どもたちがランドセルの話をしていた時「黒がいいけど女やけだめなんよ」と言う女の子がいた。

### ② 保護者のジェンダー・バイアスについて

以下のことが保育士に話されたり、連絡帳に記されることがしばしばある。

- ・「男の子なのに、ままごとやお人形が好きなんですよ」
- ・「男の子なのに、料理や手伝いが好きなんです」
- ・「女の子だから、もっとやさしくなって欲しい」
- ・「女の子らしくスカートをはかせたいが、ズボンしかはこうとしません」
- ・「男のくせに、よくしゃべるんです」
- ・「男の子なので、すぐメソメソ泣かないで欲しい」
- ・「男の子だから、もっと元気に活発に遊んで欲しい」
- ・水疱瘡の傷跡について、「女の子だったら困るけど男の子だから気にしません」

### ③ 保育士のジェンダー・バイアスについて

a. 日常の保育のなかで、以下のことを思わず言ったり感じたりすること。

- ・「女の子だから、お友だちにやさしくしてあげてね」
- ・「男の子やろ、がんばれ」
- ・男の子がお母さん座りをしているのを見て、違和感を覚えた。

b. 保育士が自らのジェンダー・バイアスに気づいて、子どもへの対応を工夫したこと。

- ・男の子が姉のおさがりのピンク色の女の子用の図柄のTシャツを着てきた日、保育士は思わず驚いた表情をしてしまった。そのことに気づいた男の子は、不安そうに保育士の顔を見たので、保育士がにっこり笑顔を見せると男の子は「お母さんが着せてくれたんよ」と明るい声で言った。
- ・ピンク色の靴と鞆を身につけてきた男の子に、他の男の子たちが「女の子みたいや」と言うので、その子はうなだれてしまった。そこで保育士が「○○ちゃんは、ピンクが大好きなんよ」と言うとき子どもたちは納得した様子を示した。

## V. 考察と今後の課題

今回実施した「参加型ワークショップ」についての参加者の評価およびファシリテーターとして参加した筆者らの体験から、次のことが明らかになった。

### ① 少人数グループで話し合うことの意義

少人数のグループでは感じていること、考えていることを自己表現することが容易であると参加者は述べている。さらに、参加者は自分の意見とは異なる他者の意見を聴き、話し合うというプロセスを通して、新しい見方、新しい考え方を見出している。

### ② ワークショップの素材として、日常生活の身近な場面のイラストを使用したことの意義

参加者は、今までの生活のなかで「当たり前」と感じていたことを、自分の現在の日常、過去の体験に照らして問い直すことにより、ジェンダーに縛られている自己への「気づき」が促される。そして、個性を尊重して生きるためには、ジェンダーへの縛りから自由になることが必要だと理解する。つまり、ここでの「気づき」は参加者をエンパワーする契機となっている。

亀田(2000)<sup>6)</sup>は「学ぶことがわたしとどのようにつながっているのか」と自分に問いかけ、「自己をつくる学習をエンパワーする」ことの重要性を指摘しているが、本研究の「参加型ワークショップ」も、そのような学習の一つのツールとして位置づけられる。

### ③ 「実感」と「理解」の両面から気づきを促す意義とそのための技法

参加者がジェンダーに関する正しい知識を理解できることと、生活実感に根ざした気づきが得られることがともに重要である。ジェンダーが歴史的・社会的・文化的に作り出されたものであるという認識は、参加者のエンパワーメントにつながる。一方、このような知識が自己のジェンダー・バイアスの修正の動機づけとなるためには、実感を伴った気づきの体験が必要である。

本研究の「参加型ワークショップ」に対する評価票のなかで、「保育・子育て実践におけるジェンダーに気づいた」および「自分のなかのジェンダーに気づいた」という項目において「よくわかった」と評価した参加者が70%代であったことは、ワークショップの進め方を工夫する必要性のあることを示唆している。特に、グループでの話し合いの後、意見の共有や共感をするのと、ファシリテーター

が解説を行うことを統合することの難しさを体験した。つまり、グループのなかで話し合われたことに沿ってコメントをする一方で、評価項目としてあげている点の理解を促すための説明を行うことは難しい。

そこで今後の課題として、ジェンダー・バイアスへの気づきを促す「参加型ワークショップ」においてファシリテーターの用いる技法の工夫が求められる。つまり、意識と行動の変革の動機づけとなる「実感」と「理解」の両面にアプローチするグループワークの技法やロールプレイの技法を適切に活用することを検討する必要がある。

### ④ 評価方法の構築

評価方法については、先行研究がないなかで一応の評価基準を考案し、ある程度の効果は認められたが、この基準を普遍的な基準としていくためには、さらなる実践と検討が重ねられていく必要がある。

### ⑤ 「参加型ワークショップ」の所要時間に関する課題

今回実施したワークショップの所要時間は、5回中3回が60分間、2回が120分間であったが、いずれの場合も時間の不足を筆者らは実感した。予定参加者の都合を考慮して時間を設定するので、制約は当然生じてくるが、各グループに数回のセッションを計画するなどの工夫が必要である。

「参加型ワークショップ」は、参加者が話す・聴く・共感するというプロセスのなかでさまざまな感情の表現ができ、積極的な参加ができるよう工夫されなければならない。そのための「時間」についても十分に検討する必要がある。

以上、今回実施した5回のワークショップの参加者の評価およびファシリテーターとしての筆者らの体験から明らかになったことを論じてきた。今後、本研究で得た知見を基礎資料として、「個の尊重」を実現できるジェンダーに敏感な保育・子育て環境の形成に有効な「参加型ワークショップ」およびその「評価方法」を妥当性のあるものへと修正していきたい。そして、それらを本研究の最終目標である地域との連携によるジェンダーに敏感な保育者養成プログラムの一環として開発したいと考えている。

## 謝辞

本研究の趣旨を理解し、ワークショップ開催のためにご協力いただいた方々とワークショップに参加して下さった方々に心から感謝いたします。

## 参考・引用文献

- 1) 三村保子・力武由美：保育・子育て実践における「個人の尊重」－ジェンダーの視点から再考する－西南女学院大学紀要、第10号、(2006年)
- 2) [http://en.wikipedia.org/wiki/Jacob\\_L\\_Moreno](http://en.wikipedia.org/wiki/Jacob_L_Moreno)
- 3) 佐藤和順、田中亨胤：生活史的アプローチによる幼稚園教師のジェンダー観の揺らぎに関する研究－ジェンダー・フリー・プログラムを手がかりにして、乳幼児教育学研究、13、(2004年)
- 4) 佐藤和順、田中亨胤：幼稚園教師の意識変化に着目したジェンダー・フリー・プログラムの効果－教師スタンスの分析を手がかりとして、保育学研究、第41巻第2号、(2003年)
- 5) 三村保子・力武由美：その子らしさを大切にする保育・子育てって何だろう？ リーフレット (2006年)
- 6) 亀田温子：ジェンダーが教育に問いかけたこと、学校をジェンダー・フリーに、明石書店、東京、1版 (2000年)
- 7) アジア女性資料センター人権ワークブック作成委員会：ジェンダーと人権ワークブック、アジア女性資料センター、東京、(2004年)
- 8) チェンバース、ロバート、野田直人監訳：参加型ワークショップ入門、明石書店、東京 (2004年)
- 9) 金香百合、浮穴正博監修：金香百合のジェンダーワークショップ、解放出版社、大阪 (2005年)
- 10) 山梨県立女子短期大ジェンダー研究プロジェクト編：0歳からのジェンダー・フリー－男女共同参画山梨からの発信、生活思想社、東京 (2003年)
- 11) 剣 陽子、山本ベバリー・アン、力武由美：若者のリプロダクティブ・ヘルスライツの確立と向上に効果的な「性(リプロ)教育プログラム」とその「評価方法」の開発、日本=性研究会議会報、第16巻、第1号(2004年)
- 12) 木村涼子：学校文化とジェンダー、勁草書房、東京、1版 (1999年)
- 13) 天野正子・木村涼子：ジェンダーで学ぶ教育、世界思想社、東京、1版 (2003年)



## A Participatory Workshop Program and Its Evaluation Indicators: Consciousness Raising toward Gender Sensitive Child Care/ Child Rearing

Yasuko Mimura\*      Yumi Rikitake\*\*

### <Abstract>

It was clarified, in our last research, that child care/ child rearing practices showing “respect for individuals,” which child careers and parents had been proud of, were actually practiced based on “respect for gender-divided roles and works.” Such a condition where specialists in child care deeply have internalized the socially constructed idea of gender is a big obstacle in the developmental environment.

Therefore, a program of participatory workshop and indicators for evaluation of the effects of our workshop program were devised in this research, under the recognition that all the people who are concerned with raising the next generation should be sensitive to gender biases rooted in their own consciousness and subconsciousness. As for materials of the program, two familiar scenes in daily life are chosen. Furthermore, under very few leading studies, indicators for evaluation of the effects of the workshop were designed in order to enhance and expand the effects of the workshop program. They were constructed based on the idea that people are motivated to change their own views of values and social norms when they become aware of gender bias and yet understand that gender is socially, culturally, and historically constructed norms following the idea of men as superior and women as inferior.

The devised workshop program was carried out 5 times at 3 child care centers, 1 kindergarten, and 1 civic center within K city, with 61 participants in all. It resulted in a clarification of the following points: (1) participants could fully feel the significance of expressing their own feelings and experiences in a small group, (2) participants could be easily involved in thinking and evoking their own feelings from the past and the present by the use of illustrations of familiar scenes from daily life, (3) participants could be awakened through both feelings and mind by their positive participation in the workshop program.

In conclusion, the participatory workshop program was an effective way to urge participants to realize their internalized gender biases on one hand. On the other hand, the following subjects were gained for future studies: (1) the need for facilitators’ skills to improve to let the workshop program develop effectively, (2) the need to reexamine of indicators used to evaluate of the effects of this participatory workshop program, and (3) the reconsideration of time distribution to achieve full effect.

**Key words:** participatory workshop, child care/ child rearing practices, gender sensitive, gender bias, evaluation, cooperation with the local community

---

\* Professor, Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University, Junior College

\*\* Part-time lecturer, Life Study Department, Seinan Jo Gakuin University, Junior College